漢詩の知識 まる見え1枚シート

形式と押韻と対句と名詩人 — この1枚で漢詩の「見方」が全部わかる。難しそうに見えて、覚えるルールはほんの少しです。

★★★ 入試超頻出　★★ よく出る　★ 余裕があれば　💡 覚え方　▶ 例文

① 形式を見分ける ▶ ② 何句・何字か数える ▶ ③ 押韻を確かめる ▶ ④ 対句を探す ▶ ⑤ 詩人と内容をつかむ

まずは「何言・何句の詩か」を言えるようになるのが第一歩。設問の半分はここで解けます。

読む順：**左の列を上から順に ▶ 終わったら 右の列へ（見出しの番号が順番です）**

1 まず大きく2つに分ける（古体詩と近体詩）

分類	時代	ルール	頻出度
古体詩（こたいし）	唐より前が中心	句数・字数・押韻が**自由**（決まりがゆるい）	★★
近体詩（きんたいし）	**唐以降**に完成した形	句数・字数・押韻・対句が**きっちり決まった定型**	★★★

💡 **「近体詩＝新しい（唐以降）のにルールが厳しい／古体詩＝古いのに自由」**と逆っぽく感じるので要注意。入試で問われるのはほぼ**近体詩**です。

2 近体詩の4種類（句数 × 字数）

近体詩は「**何句か（絶句・律詩）**」と「**一句が何字か（五言・七言）**」の組み合わせで4種類に分かれます。

	一句が5字＝**五言**	一句が7字＝**七言**
4句＝絶句	五言絶句（ごごんぜっく）	七言絶句（しちごんぜっく）
8句＝律詩	五言律詩（ごごんりっし）	七言律詩（しちごんりっし）

💡 **「句の数」＝縦の長さ／「言（字数）」＝横の長さ**。絶句は4句で短く、律詩は8句で長い。一句5字なら五言、7字なら七言。これを掛け合わせるだけ。

3 絶句の構成 — 起承転結（4句）

句	名称	役わり
第1句	**起句（きく）**	うたい起こす（場面を始める）
第2句	**承句（しょうく）**	起句を受けて続ける
第3句	**転句（てんく）**	話をぐっと転じる（場面・視点を変える）
第4句	**結句（けっく）**	全体を結ぶ（しめくくる）

💡 **「起・承・転・結」**＝作文でおなじみの構成そのもの。第3句の**転句**で内容がガラッと変わるのがポイント（ここに作者の心情が出やすい）。

4 律詩の構成 — 4つの聯（8句）

律詩は8句を**2句ずつ4組**に分け、それぞれを「聯（れん）」と呼びます。

句	名称（聯）	読み	備考
第1・2句	**首聯**	しゅれん	うたい起こし
第3・4句	**頷聯**	がんれん	**対句にするのが原則**
第5・6句	**頸聯**	けいれん	**対句にするのが原則**
第7・8句	**尾聯**	びれん	しめくくり

💡 **「首（あたま）→頷（あご）→頸（くび）→尾（しっぽ）」**と体の上から下へ順に並ぶと覚える。真ん中の頷聯・頸聯が対句になる、と一緒に押さえる。

5 押韻（おういん）— 同じひびきで句末をそろえる

押韻とは、決まった句の**末字（いちばん下の字）**を、同じひびき（韻）の字でそろえること。

形式	押韻する句末	頻出度
五言の詩	**偶数句末**（第一句末は**踏まないことが多い**）	★★★
七言の詩	**偶数句末＋第一句末も踏むことが多い**	★★★

💡 基本は「**偶数句の末字で韻をふむ**」。あとは**五言＝1句目は踏まない／七言＝1句目も踏む**と上乗せで覚える。

💡 **韻の位置イメージ（◯＝押韻する句末）**
五言絶句： 1句 —／2句 ◯／3句 —／4句 ◯
七言絶句： 1句 ◯／2句 ◯／3句 —／4句 ◯
五言律詩： 2・4・6・8句が◯（1句は—が多い）
七言律詩： 1・2・4・6・8句が◯

▶ **例文**：孟浩然「春暁」（五言絶句）
春眠不覚**暁（ギョウ）** ／ 処処聞啼**鳥（チョウ）** ／ 夜来風雨声 ／ 花落知多**少（ショウ）** → 第2句末「鳥」・第4句末「少」で押韻。※五言では第1句末を踏まないのが原則だが、この詩は**例外**で第1句末「暁」も同じ韻を踏んでいる（暁・鳥・少が同じひびき）。

6 対句（ついく）— 形をそろえて並べる

- **対句とは**：2つの句で、同じ品詞・同じ組み立ての語を位置をそろえて並べる技法（名詞↔名詞、動詞↔動詞…）。
- **律詩では：頷聯（3・4句）と頸聯（5・6句）を対句にするのが原則**。
- 絶句にも対句は使えるが、必須ではない。

▶ **例文**：杜甫「春望」より（頷聯）
感時花濺**涙**（時に感じては花にも涙を濺ぎ）／ 恨別鳥驚**心**（別れを恨んでは鳥にも心を驚かす）→「花↔鳥」「涙↔心」のように語が対応＝対句。

💡 **「律詩の真ん中（頷聯・頸聯）は対句」**と1セットで暗記。設問「対句になっているのはどれか」は、まず3〜6句目を疑えば当たりやすい。

7 句の区切り方（読みのリズム）

字数	区切り	イメージ
五言	**2字 ＋ 3字**	春眠／不覚暁
七言	**4字 ＋ 3字**（さらに2＋2＋3も）	朝辞白帝／彩雲間

💡 どちらも**「後ろが3字」**で終わるのが共通点。五言は前2字、七言は前4字。書き下しや訓読のときの意味の切れ目に役立つ。

8 平仄（ひょうそく）— 名前だけ知っておけばOK

- 漢字の声調（音の高低・上がり下がり）を**平声（ひょうしょう）**と**仄声（そくせい）**の2種に分け、その配置の決まりを**平仄**という。
- 近体詩はこの平仄の並びにもルールがあるが、高校段階では「そういう決まりがある」と**名称を知っていれば十分**。細かい配列は問われにくい。

9 代表的な詩人（中国）

詩人	呼び名・別名	時代	一言	頻出度
▼ 唐の詩人（盛唐〜中唐）				
李白（りはく）	**詩仙（しせん）**	盛唐（8世紀）	自由で雄大、酒と月を愛したスケールの大きい詩風	★★★
杜甫（とほ）	**詩聖（しせい）**	盛唐（8世紀）	戦乱の世を見つめた重厚で誠実な詩風。律詩の名手	★★★
白居易（はくきょい）	字は**楽天**＝**白楽天**	中唐（8〜9世紀）	平易でわかりやすい詩。「長恨歌」が有名。日本でも愛読された	★★★
王維（おうい）	「詩仏」とも	盛唐（8世紀）	自然・山水を静かに描く。画家でもあった	★★
孟浩然（もうこうねん）	—	盛唐（7〜8世紀）	自然や田園をうたう。「春暁」が代表作。王維と並び称される	★★
▼ 唐より前の詩人				
陶淵明（とうえんめい）	陶潜（とうせん）とも	東晋〜南朝（4〜5世紀）	役人をやめ田園に隠れた「田園詩人」。「帰去来辞」が有名	★★

💡 **「李白＝詩仙／杜甫＝詩聖／白居易＝白楽天」**の3点セットは最優先。李白も杜甫も同じ盛唐（同時代の親友）、陶淵明だけは唐よりずっと前（東晋）と時代をセットで覚えると混同しません。

💡 **「仙人の李白／聖人の杜甫」**と1字で区別。スケール大きく自由なのが仙（李白）、まじめで重厚なのが聖（杜甫）。

10 解き方の最終チェック（設問が来たら）

- **句数を数える**：4句なら絶句、8句なら律詩。
- **一句の字数を数える**：5字なら五言、7字なら七言 → これで「◯言◯句の詩」が確定。
- **句末を縦読み**：偶数句末がそろっていれば押韻（七言は1句末も）。
- **真ん中を見る**：律詩なら頷聯・頸聯が対句か確認。
- **作者と詩仙・詩聖などの呼び名・時代**をひもづけて答える。